

県外博物館視察からの考察 In 徳島県立博物館

中沢秀一¹⁾

Considerations from Visit to out of Prefectural Museums In Tokushima Prefectural Museum.

NAKASAWA Syuichi

キーワード：徳島県立博物館、リニューアルオープン、ユニバーサルデザイン、博物館事業、教育普及活動

はじめに

現在青森県立郷土館は休館中である。よって学芸課では、展示見直しを構想するワーキンググループ2(以下WG2)が中心となって活動している。より良い展示を目指すためにも、近年リニューアルしたり資料の見せ方等で特徴的な展示をしたりしている先進的な館を視察し、参考とすることになった。今回はその取組みの一つである徳島県立博物館の視察内容について紹介するとともに、青森県立郷土館の展示リニューアルにどう参考にしていくのかという点について考察したい。

経緯

WG2で国内の先進的な取組みをしている都道府県立博物館をピックアップして、視察のオファーや日程がマッチングしたのが徳島県立博物館であった。令和になってからのリニューアルが特に注目される場所であり、青森県立郷土館の再オープンに向けて多くを参考にできるのではないかとということで、視察に向かうことになった。

視察内容

1 日時

令和4年11月15日(火) 9時30分～16時

2 視察者

青森県立郷土館	総務課副課長・主幹	工藤伸崇
同	学芸課副課長・学芸主幹	小山隆秀
同	主任研究主査	中沢秀一

3 対応者

徳島県立博物館	副館長	長谷川賢二氏
同	専門学芸員	磯本 宏紀氏

4 博物館概要

(1) 構成

- ・3館棟(文化の森総合公園内に敷設、同棟内に近代美術館、21世紀館、鳥居龍蔵記念博物館が併設)

建築面積 8,363 m²

延床面積 22,382 m²(合計一積層部分を含めると23,814 m²)

8,063 m²(博物館専用スペース)

常設展示室 2,495 m²

企画展示室 325 m²

収蔵庫・事務室等 5,243 m² ※青森県立郷土館より広い

(参考比較)

- ・青森県立郷土館主要施設

建築面積 2,655.11 m²

延床面積 7,606.83 m²

常設展示室 2,514 m²

1) 青森県立郷土館 主任研究主査(〒030-0802 青森市本町2丁目8-14)

大ホール 487 m²

収蔵庫・事務室等 1,099 m²

(2) 部門(令和4年度現在)

自然担当(動物・植物・地学)、人文担当(考古・歴史・民俗・美術工芸)

なお、学芸員は14名(自然7名、人文担当6名(考古1名、歴史2名、民俗2名、美術工芸1名)、このうち鳥居龍蔵記念博物館兼務が1名。

(参考)ほかに、館長、副館長(上記の歴史学芸員1名に含まれる)、企画担当の事務職員を合わせ計25名。

なお、総務担当部署が同館になく、21世紀館が複合3館の総務業務を一括して行っている。

(3) 沿革(抜粋)

(1959) 旧博物館(徳島県博物館)設置及び開館。

(1980) 文化の森構想発表

(1985) 文化の森総合公園起工式挙行、基盤整備工事着手

(1987) 各文化施設(文書館を除く)建設工事着手

(1988) 博物館展示工事着手

(1989) 博物館・近代美術館・21世紀館棟本体工事竣工

(1990) 文化の森総合公園文化施設条例施行により、教育委員会所管のもと、博物館(徳島県立博物館)及び博物館協議会設置

文化の森総合公園開園、博物館開館

(2010~2011) 文化の森総合公園開館20周年記念事業を実施。博物館常設展示室の「リフレッシュ事業」を実施(一部の中・小テーマ更新など)

(2015~2016) 文化の森総合公園開園25周年記念事業「安全安心のモデル事業」の一環として、博物館常設展示室のリフレッシュアップ(サインやパネルの更新、多言語解説の導入など)、収蔵庫の耐震対策を実施

(2018) 新常設展基本構想策定

(2019~2020) 新常設展実施設計

(2020) 新常設展構築業務着手

教育委員会から知事部局に移管

開館30周年、30周年記念共同企画展「文化遺産を後世に伝えるーとくしまデジタルアーカイブーを開催」

(2021) 新常設展構築業務完了、新常設展オープン

ア 近年のリニューアルに関わる博物館の基本構想について

1990年に現在地にオープンした徳島県立博物館は、開館10年目の頃よりリニューアルしたいという話が出ていたが、不具合の出た空調や、内壁、外壁などの小規模な改修を行う程度で大幅なものは行われてこなかった。しかし、30周年を目前にした2017年、展示を中心とした小規模の改修・変更ではどうにもならないという声が外部から多くなってきたことを受け、知事の指示のもとにリニューアルが行われることになったとのことである。

業者選定に当たってはプロポーザル方式を採用し、改修に際して設計業者と施工業者を分けなければならないという前提だったが(営繕部局のルール)、博物館においては設計と改修で乖離があるといけないということで、改修は委託により実施したとのことであった。

イ 施設設備などについて

2017年から常設展のリニューアルに向けた準備を進め、約1年に及ぶ展示設計の期間を経て、2020年9月からは旧常設展を閉室し、新常設展の展示制作を行った。

リニューアルに当たり、エントランスそのものを変え、入ってすぐ徳島らしさがわかる展示をする、館内のそれまで収集してきた資料を多く使う、展示替えをフレキシブルに行える構造にする、現代に合わせたユニバーサルデザインを積極的に取り入れる、特に意識して映像系のコーナーを設けるという点をコンセプトとして展示計画が作成された。

改修を2020年9月に開始、翌2021年8月オープンという極めてタイトな日程であったが、業者と綿密に連携し期限内で完了させた。なお、建物は21世紀館、近代美術館、鳥居龍蔵記念博物館、県立博物館の複合施設であり、博物館部分のみ改修するということが難しいため、今回のリニューアルは展示のみの改修、新装ということになっている。ちなみに、展示設計・改修のいずれも(株)乃村工芸社が請負。

また、改修後に発生した想定外の課題や問題点として、「展示替えしやすいフレキシブルな構造」を謳いながら、

予算の都合上、展示替えしやすい展示ケースの制作がかなわなかったということと、分野、コーナーによる頻度の差が生じてきたことが挙げられるとのことであった。

駐車場については、文化の森総合公園の敷地内ということもあり、大型車を含み 100 台以上収容できる十分な面積が確保されているが、敷地が広いゆえ博物館から遠いところに止めざるを得ない場合もある。

(文化の森を背景に)



(外観)



(案内板)



(博物館エントランスゾーン (2階))



ウ 展示について

◆常設展示

まずイントロダクションとして、常設展示前の「ロビーゾーン」や、交流スペースに「徳島まるづかみ棚」を設置、映像ダイジェスト、特産物、食、気候、文化などを視覚に訴えるような展示構成で徳島県をわかりやすく紹介している。自然、考古、歴史、民俗、トピックスと、基本は順番に沿った展示ではあるが、それぞれの分野の明確な区域分けはせずひとつの流れのように構成している。また、常設展示室内に「ミュージアムストリート」という導線を設けることで、ここをたどることで館内の展示の流れを一定程度把握・理解できるようになっており、時間の限られた来館者や他の施設も併せて観覧したい来館者等に配慮している。

出土又は発掘中の恐竜化石骨格標本や、貝の化石地層の剥ぎ取り、銅鐸、形象埴輪、観音像、祭りの山車や文楽人形、漁に使われた漁具や唐箕など稲作系の民具、トピックスでの外国産出の恐竜や古代動物の骨格標本、超古代岩石(先カンブリア紀等)、蝶をはじめとする昆虫類標本等、他館に比べて実物資料の展示が多い所と徳島産出や在来に限らない展示を多く取り入れている所がこの館の特徴でもある。また、岩石・鉱物資料例えばサヌカイトや恐竜化石の一部、銅鐸などを実際に触ったり、叩ける体験コーナーも充実し、視覚だけでなく体感を意識した展示も印象的だった。博物館展示は触ってはいけないものというイメージがある中、このような展示をちりばめることで、化石などを「触れる」とか、サヌカイトは「叩くときれいな音(金属音に近い)がする」など感動や発見がより高まり、博物館がより身近な存在にもなれることも実感させられた。

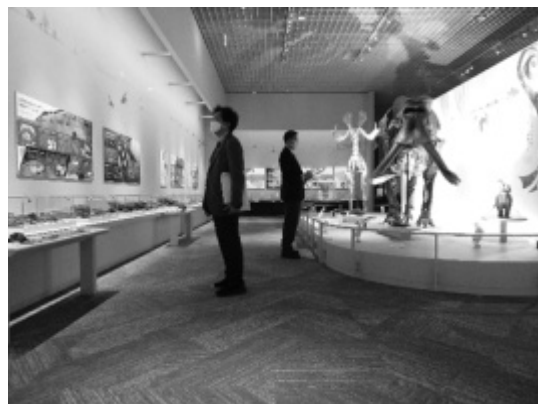
◆徳島まるづかみ棚

令和2年度文化庁地域と協働した博物館創造活動支援事業「飛び出せ博物館!!「徳島まるづかみ事業」」事業を踏まえ、同館の総合的な展示コンセプトである「徳島まるづかみ」をイメージする展示のダイジェスト版としてロビーゾーンに内に設置。コミュニケーションゾーンには、学芸員コーナーもあり、所属分野や展示担当、現在行っている研究などを紹介している。



◆自然関係展示：(徳島恐竜コレクション、地質時代の徳島、自然とくらし①)

「徳島恐竜コレクション」の展示では、徳島県勝浦町の中生代白亜紀地層から出土した鳥脚類イグアノドン類の歯化石をはじめとする、徳島県内で発掘された動植物の化石を中心とした展示構成となっている。一部恐竜(マラウイサウルス等)の骨格標本はアフリカ・マラウイ産出だったりするものの、やはり四国初発見の恐竜化石というのは魅力的で興味を惹かれる展示となっている。





◆歴史・民俗関係展示室：(先史～近現代、徳島の祭りと芸能、自然とくらし②)

「自然とくらし」の展示区画では、民俗と自然の分野の融合が特徴的であった。
暮らしに関わる自然というような構成になっている。

(例) 漁業・漁具、水辺の生活に関する展示に関連して、採れる魚介類の紹介や、周辺の自然環境、気候、動植物に関するジオラマや標本レプリカを使った展示等をうまく融合させて展示している等が面白い。





◆トピックス展示：（地球と生命の歴史、生物の多様性）

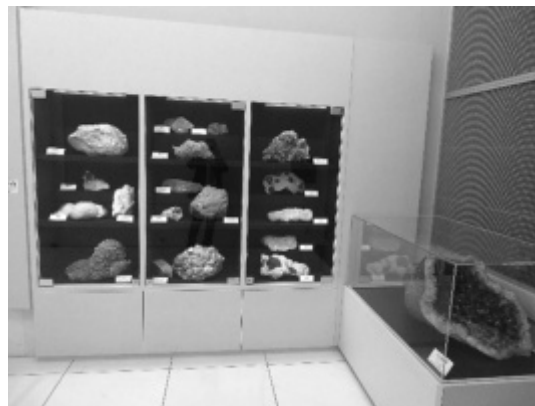
必ずしも徳島県に由来するものではない（例：恐竜骨格標本は北米産出）が、館の展示にインパクトを与えるという点でも見ごたえという点でも迫力のあるものだった。青森県立郷土館でもリニューアル工事後にゆとりがあるならエントランス付近等で恐竜骨格（青森県由来ではない）が出迎えるような演出として参考にしたいところではある。

なお、常設展示内で5～6箇所 AR、VRがあり、貸し出されるタブレットで該当箇所にあるQRコードを読み込むことでタブレット上に表示される。うち1つがこのトピックス展示にあり、展示室内の画像にARの動く恐竜が重ねて表示される仕掛けになっていた。



◆コミュニケーションゾーン＝（多目的ホール・自然史コレクション）

大画面4K（9枚の液晶ディスプレイ）で構成。徳島の自然・風土と他分野を紹介している。



なお、これらの常設展示室については頻繁に展示替えをする目的で設定されているため、順路が必ずしもナンバー順になっていない構造である。（例＝3 先史・古代展示区画の隣に10 歴史・文化コレクション区画、7 徳島の祭り、8 徳島の自然と暮らし区画の次が、12 地球と生命の歴史区画となっているなど…）

また、展示ケースの亚克力カバーは経年劣化が発生し歪むこともあり、ガラスの方が長い年月での耐久性があるということであった。青森県立郷土館リニューアル後の常設展示構成の検討に当たり、参考としたい。

◆展示注目点①（触れる展示の例）



サヌカイトや銅鐸は叩くと鋭い金属音。なかなか聞けない音であり興味深かった。恐竜化石に触るというワクワク感や、蟬の鳴き比べも違いがはっきりとして面白い。

◆展示注目点②（わかりやすい展示・解説＝ユニバーサルデザインを意識して）



すべての人に展示を見てもらうための取組として、分かりやすい・見やすい展示を意識した展示を行っている。構成は、奥が通常の解説パネルで真ん中にメインとなる資料を置き、手前は車いすの方や子ども等背の低い方等に配慮した解説と3段構えとなっていた。

青森県立郷土館リニューアル後の常設展示構成の検討に当たり、かなり参考となる事例。

◆企画展・特別展（当館では特別陳列という）

年に企画展2回、特別陳列1回実施している。基本的に各学芸員が割当てのように順番に行っている。3年計画で企画され、テーマ決め、予算要求で調査費・旅費をつけてもらい、関係する資料や自館にない物は借用交渉し、研究・収集の集大成として展示会を開催するという流れ。

視察期間中行われていた今年度の特別陳列は自主開催で無料。「阿波の旅人―旅と名所の江戸時代―」というテーマだった（R4.10.15～11.27）。

内容は江戸時代からの「旅の大衆化」の解説から、四国遍路を中心としたと他地域の多様な信仰・巡礼の旅の紹介、さらに旅の発展とともに各地で名所が成立していったことなどを収蔵資料等をもとに解説していくというものだった。



エ その他

◆収蔵庫

同館には、4階と1階に各分野の収蔵庫がまとまっているものの、スペースはオーバーフローで通路にも出している状態という。その対策として常設展示でなるべく原資料または実物資料を出していくという方針を取っているが限界であるとのこと。改修時の展示や施設等でのユニバーサルデザイン化(バリアフリー化、エレベーターの増設、トイレの改修等)の関係で有効面積は必然と少なくなり、収蔵庫増設はできなかった。外部に収蔵庫を持っていくという計画も今のところはなく、この問題は解決にいたっていないということであった。

また、館内資料の小規模燻蒸を年に3～4回、収蔵庫は3年に1回、いずれも薬剤中心で行っている。なお、同館は公開承認施設となっているが、博物館法改正等によりこれまでよりも資料管理や館内環境の整備などの条件がきびしくなることから、引き続き認定を維持するための取組や予算獲得の方法を議論していかなければならないとのこと。

◆バックヤード



※資料運搬用エレベーターは大きめのものであった。

◆改修工事期間中(休館中)における博物館活動

リニューアル改修は常設展示室で行われ、館全体ではないために休館中は企画展示室で特別展や企画展、教育普及活動は通常通り行われていた。また、改修の進捗に合わせて常設展の展示替えを順次行い、オープンに間に合わせていった。

休館中の主な取組としては特に2020年度に「徳島まるづかみ」事業を行っており、地域連携を目的に県内各地に資料をもって行き、展示やワークショップを行うというものであった(青森県立郷土館における巡回展に該当)。

例＝徳島県南 海陽町立博物館＋徳島県立博物館

両館の連携により、双方の学芸員がそれぞれの専門分野に基づき、県南地域に関するテーマで講演、海陽町立博物館に隣接する海南文化館でセミナーを開催した。

行事の広報は連携館ごとで、行事の運営は共同で実施した。

第1回「海と魚食文化」6月 担当：徳島県立博物館学芸員

第2回「四国南東部の地形と地質のみどころ案内」7月 担当：徳島県立博物館学芸員

第3回「徳島の郷土刀 海部刀」8月 担当：海陽町立博物館学芸員

第4回「役行者の虚実と修験道」10月 担当：海陽町立博物館学芸員

オ 博物館活動について

◆教育普及事業の主な実践例

「開かれた博物館」をめざし、館員が県民と直接交流できる良い機会ととらえ、力点を置いて取り組んでいる。令和3年度は年間73回を計画し、68回の実施。中止5回にうち3回は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、2回は悪天候によるものであった。

(主な例)

わくわく昔体験、歴史散歩、野外生き物観察、楽しい地学体験教室、ミュージアムトーク等

・学校支援事業

学校の授業への講師派遣(出前授業)

当該事業は、青森県立郷土館という移動博物館と出前授業の融合のような取組である。依頼に応じて学芸員を派遣するが、少し違うのは複数人で訪問するのではなく、主に学芸員1人で行うところである。内容は担当する学芸員の分野としての専門性が高く、回数は昨年度の青森県立郷土館とほぼ同じくらいの年間19回であった。申込み校種、学年は、保育園から中学校までの各学年で、これも同様に小学3年生が多い傾向にあるとのこと。

教員のための研修

徳島県教育委員会からの依頼により、館内外における教員対象の研修会で職員が指導に当たっている。21年度分については新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止となったが、17年度の例では、『教員のための博物館の日 in 徳島 2017』と題し、大学・研究機関等研修、10年次研修教員対象で、「授業で博物館をどうやってつかうの」の講義と展示案内・解説「徳島の自然と歴史(常設展示の解説と質問)」を学芸員全員で行う等、合計5件実施している。

◆ボランティアスタッフ等

公募でイベントボランティアスタッフを募っている。主に教育普及活動に活用しており、資料解説、資料整理等には活用していない。近年新型コロナウイルス感染症拡大に伴い留まっていたが、今年度は分野ごとに活動している模様。年齢層は老若男女問わず申し込みがあり、高校生も多い。いままで「徳島まるづかみ事業」の補助スタッフや恐竜発掘のクリーニング作業の手伝い、海岸の漂着物拾いなどで特に実績がある。

◆インクルーシブデザインについて

地域の人々や利用者の意見を聞き、共に作り上げていくというプロセスを重視した取り組みの中で、インクルーシブワークショップを行い、施設や展示に考えを反映させている。

(例)

・バリアフリー対応の充実

・展示への発展(3のウ「展示注目点②(わかりやすい展示・解説=ユニバーサルデザインを意識して…参照)

・手話通訳のアプリ導入

・色盲の方への配慮等

◆多言語対応について

英語表記のみ。博物館の資料は外国語の訳がない表記が多く統一できなかった。

◆デジタルコンテンツ(YouTube 番組等) 政策のテーマ設定や工程について

・動画はアップしている。ただ、担当を決めているわけではなく、特定の職員の努力や技術力に頼っている状態であるという。

→数回の研修や本人の意欲で職員のほとんどが技術を身に付けられるものではないという実態の模様。

→動画を続けるのであれば、以前あった青森県立郷土館のキョドチャンネル特別編のように、予算は必要だがここはプロにお願いするという部分がないと厳しいのではないかと、現状に当てはめて考えさせられた。

5 青森県立郷土館の展示リニューアルへの考察

今回視察した徳島県立博物館の取り組みから、青森県立郷土館展示リニューアルに向けて特に注目される項目について考察したい。

まず、常設展示については、触れる・体験展示とユニバーサルデザインを意識した展示に注目したい。さわれる・体験展示は確かに青森県立郷土館でもわくわく体験室を中心にあることはあったのだが、各分野展示の注目点として取り上げられていたわけではない。よって、各分野ごとの展示の中で特に意識させたい資料などを1点か2点ピックアップし、触ったり、持ったり、比べたり、聞いたり、嗅いだり等と五感に訴えかけるようなコーナーを設けることは出来ないだろうか。私見で申し訳ないが、例えば明治維新時の戊辰戦争で各藩が使用した銃弾や砲弾の違いを、実際に触ったり、持ったりして比べてみるというものや、県内の植生で繁茂する木や植物の断片などを手触りや匂いなどから利き比べるというもの、岩石の肌触り、動物の鳴き声の違いを感じられるというもの等々である。我々視察団の体験からも、五感に訴える展示は視覚だけの展示よりもはるかに知的好奇心が高まり、博物館が身近な存在になれるということではほぼ間違いない。また、ユニバーサルデザインについても、これからの博物館であるためには意識せざるを得ないはずで、参考にするならば今回の徳島県立博物館の例は分かりやすい。上記ウ 展示について ◆展示注目点②(わかりやすい展示・解説＝ユニバーサルデザインを意識して…)の抜粋から「すべての人に展示を見てもらうための取組として、分かりやすい・見やすい展示を意識した展示を行っている。構成は、奥が通常の解説パネルで真ん中にメインとなる資料を置き、手前は車いすの方や子ども等背の低い方等に配慮した解説と3段構えとなっていた。」ということで、これを全く真似するという事は出来ないにせよ、かなり意識した構成を取入れても良いのではないかと考えている。

また、分野を融合させた展示に関しては、上記の歴史・民俗関係展示室：(先史～近現代、徳島の祭りと芸能、自然とくらし②)の部分でも触れたが、特に「自然とくらし」展示区画の民俗と自然の分野の融合が特徴的であった。ここは、暮らしに関わる自然というような構成になっており、漁業・漁具、水辺の生活に関する展示に関連して、採れる魚介類の紹介や、周辺の自然環境、気候、動植物に関するジオラマや標本レプリカを使った展示等をうまく融合させているところがとても面白かった。青森県立郷土館リニューアルに関しても分野融合が話題になっているところから、とても参考になる事例であると考えている。まず、それぞれの地域には自然があって、その環境に合わせながら人々は恵みを享受して生活し、民俗や文化が生まれているわけであり、その融合や共存というものはいわば必然のものであると言っても過言ではない。その融和をうまく展示に生かすことができれば有意義な空間を生み出すことが出来るのではないかと考える。これに対して、従来通りの各分野独立の展示を重要視する構成も考えられるが、リニューアル工事を行うにあたってユニバーサルデザインの観点を取り入れなければならないことから、現実問題として展示面積の縮小が考えられる。よって、従来の展示スペースが確保できなくなることから、分野融合の展示を考えていかざるを得ないのではないかと考える。ここは各分野担当学芸員の思いや構想からも意見が分かれる所ではあるが、少なくとも今回の徳島県立博物館や個人的に見学してきた他の博物館を見る限り、融合の展示が各分野のアイデンティティーを阻害させたり、後退させたりというマイナスのイメージを持つには至らなかった。よって、今後の工程や現状に当てはめて考えれば決して悪くはない、むしろベターな展示構成だととらえて今後のWG2や館内リニューアルに向けた取り組みの中で生かしていきたい。

他にも、徳島まるづかみ棚を青森県の内容に置き換えて考えてみたり、映像を使った県内の紹介を取入れてみたり等、参考に出来る事例は多分にあった。これまで特筆したこと以外も含めて、視察内容を青森県立郷土館の取り組みの中で参考にしながら、来るべきリニューアルオープンに向けて備えていきたい。

謝辞

本稿で取り上げた視察の実施及び本原稿執筆にあたって、徳島県立博物館 副館長 長谷川賢二氏、同専門学芸員 磯本 宏紀氏他、同博物館各位に御協力を賜りました。ここに記し、感謝申し上げます。

《参考文献》

- 2022 「徳島県立博物館年報」第31号(令和3年度) 徳島県立博物館
- 2021 徳島県立博物館 常設展図録「徳島まるづかみ」－“いのち”と“とき”のモノ語り－ 徳島県立博物館
- 2021 令和2年度 文化庁と共働した博物館創造活動支援事業 飛び出せ博物館！！「徳島まるづかみ」事業 事業報告書 「徳島まるづかみ」事業実行委員会

